

人が聖地を訪れる理由―巡礼と観光の比較から―

渡邊 陸

本論文では、人が聖地へ向かう理由を明らかにするため、巡礼者と観光客に分け、文献研究により、それぞれが聖地へ訪れる理由を比較しながら考察した。仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教について、それぞれ具体的な例をもとに国の歴史や巡礼のパターンについて調べた。

仏教とキリスト教は願いが目的の巡礼、ヒンドゥー教は規範が目的の巡礼、イスラム教は願いまたは規範が目的という、両方の性質を兼ね備えた巡礼だということが分かった。観光客については「現地交流」と「文化見聞」を求めて聖地を訪れることが分かった。また、巡礼と観光が共存する例として仏教の四国遍路とキリスト教のサンティアゴ巡礼を取り上げ、信仰のない巡礼者を発見した。信仰のない巡礼者は観光客と同じく人との交流を求めているが、聖地へ至るまでの道中にそれを求めている。巡礼者、観光客、信仰のない巡礼者を比較した結果、巡礼者と観光客の間には、信仰によって現地での目的は異なるが、「聖地までの道のりは短いほうが良い」という共通点があった。観光客と信仰のない巡礼者の間では、「人との交流」という目的は同じであったが、前者は文化見聞を踏まえて現地での交流を求めるのに対し、後者は道中での交流を求めている。同時に、後者は聖地までの道のりを引き伸ばそうとするという特徴が確認できた。

今後の課題として、さらに多くの宗教と国、そして観光の例を調べ、比較する必要がある。本論文で扱った宗教は4つのみであり、その他の宗教を調べることでより巡礼のパターンが明確になる。また、観光においても同じことが言える。本論文で扱ったもの以外の観光についても調べ、人が観光に何を求めているのかを、より確実に知見化する必要がある。